

2025 年度ヒューマニスティック英語教育研究会(HELES)年次大会参加登録登録に関して

拝啓

先生方には益々御健勝の事とお喜び申し上げます。ヒューマニスティック英語教育研究会は、Carl Rogers 氏が提唱した Whole Person Education（全人的教育）の立場を継承し、教育の最高目標を Fully-functioning Person（各人が持って生まれた潜在的可能性をフルに発揮して生きる人物）としての人格の成長に置いた英語教育の、交流、研究と前進を目標とし、2018 年に設立されました。この度、2025 年度当研究会年次大会を以下の日時・会場にて開催を計画しております。本研究大会を皆様及び当研究会のさらなる飛躍となるものにしたいと願っております。奮っての御参加をお待ちしております。

日時：2025 年 10 月 11 日（土）10:00~16:25

（研究会後、茶話会・懇親会（希望者）を行います。）

開催方式（場所）：対面方式（大阪商業大学）

参加費：会員・学部学生：無料

大学院生・一般参加者：1,000 円（資料代含む）

参加登録：2025 年 10 月 8 日（水）までに以下のリンクより登録をしてください。

<https://forms.gle/f4XpEbvWmvS5eMgv8>

問い合わせ先：柴田直哉(shibata-n48@cc.osaka-kyoiku.ac.jp)

敬具

2025 年度ヒューマニスティック英語教育研究会(HELES)年次大会プログラム(予定, 2025 年 9 月 29 日段階)

総合司会: 柴田直哉(大阪教育大学)

	プログラム（時間）	登壇者	
1	開会挨拶(10:00~10:05)	加賀田 哲也 (大阪教育大学)	
2	参加者交流会（10:05~10:25）	柴田 直哉 (大阪教育大学)	
3	研究・実践発表 * 各発表要旨は別頁にて掲載	教室 A	教室 B
	10:30~10:55	木村 祐太 (金沢市立西南部中学校)	山本 孝次 (愛知県立刈谷北高等学校)
	11:00~11:25	田村 健二 (町田市立南成瀬中学校)	三山 寿紀 (大阪商業大学)
	11:30~11:55	牧野 尚史 (滋賀大学教育学部附属中学校)	高山 渉 (関西学院大学)
	12:00~12:25	伊藤 世理子 (名古屋市立上野小学校)	
4	会員総会 (12:25~12:40)	加賀田 哲也 (大阪教育大学)	
昼休憩（12:40~13:40）			

5	ワークショップ (13:40~15:10)	柴田 直哉 (大阪教育大学)
6	招待講演 『外国籍の子どもたちを巻き込んだ、子供の自己実現の支援』（仮題） (15:20~16:20)	伊木 ロドリゴ先生 (司会：柴田 直哉)
7	閉会挨拶 (16:20~16:25)	加藤 拓由 (岐阜聖徳学園大学)
8	茶話会（出版記念会） (16:30~17:30)	
9	懇親会 (希望者)	

研究・実践発表要旨（教室 A）

発表者：木村 祐太（金沢市立西南部中学校）

発表時間：10:30~10:55

Title: Integrating Unit Themes to Foster Understanding of Others: From Grammar Introduction to Production in Junior High School

Summary

This practice aims to design grammar lessons that are closely related to unit themes, fostering students' personal growth and understanding of others. In many textbooks, new grammar is naturally embedded in the unit text. However, practice and production tasks often become mechanical and lose connection with the theme. To address this, the presenter has designed oral practice and self-expression activities to align closely with the theme, helping students think beyond language form.

One example is a lesson on “Wh-questions + to-infinitive” in a unit about universal design for second-year junior high school students. The focus was on social minorities, specifically support for homeless people. The lesson flow was:

- (1) Show photos of homeless shelters in urban areas and ask students about their location and use.
- (2) Present grammar form, meaning, and function, followed by pair practice using the photos.
- (3) Discuss possible support methods in pairs, starting with “Tell me how to help the homeless people.”
- (4) Provide statistics on homelessness and read a short passage about “invisible homeless” people.
- (5) Have students write their ideas, beginning with “I want to tell you about what to do for the homeless people.”

This approach allows grammar practice to lead naturally into meaningful output that promotes awareness and empathy.

発表者：田村 健二（町田市立南成瀬中学校）

発表時間：11:00~11:25

Title: 3 領域の視点を活用した中学校英語「書くこと」の授業設計と学習者の変容

Summary

加賀田他（2022）は、自己とのかかわり（自己関与性）、他者とのかかわり（他者関与性）、そして社会や世界とのかかわりの 3 領域から英語教育を論じている。この 3 つの視点は、筆者にとって授業改善の方向性を見直すきっかけとなった。平成 29 年告示の中学校学習指導要領外国語科では、「目的・場面・状況」を明確に設定した言語活動の重要性が示されているが、その「目的」をどのように設定するかは授業実践の中で課題であった。本実践は、この 3 領域の視点を「目的」の設定の際に参考にし、「書くこと」の授業デザインに取り入れ、生徒の変容を検証したものである。

使用教材は Here We Go!（光村図書）で、1 年生を対象として、3 種類の「書くこと」の活動を行った。Unit 7 では、教科書の登場人物に冬休みの思い出を伝える手紙を書き、教科書と生徒のつながりを深めた。Unit 8 では、小学 6 年生に向けて学校行事を紹介するポスターを作成し、書き手が伝える相手を意識する活動とした。また、東京都の中学校英語スピーキングテスト（ESAT-J）の実施をきっかけに、理想の部屋・理想の 1 日・不幸な 1 日をテーマとする自己表現活動を行い、自分を見つめ直す機会とした。

これらの活動は、学習指導要領の 3 つの柱（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）をバランスよく育てることをねらいとした。結果として、生徒は語彙や文構造の活用力を高めただけでなく、自分の考えや気持ちを英語で表現する意欲が向上し、他者や社会とのつながりを意識する姿勢も見られた。本発表では、生徒の作品や感想を示し、人間理解や人間形成の観点から中学校英語の授業改善の意義を考察する。

発表者：牧野 尚史（滋賀大学教育学部附属中学校）

発表時間：11:30~11:55

Title: 生徒の心の琴線に触れる英語授業

Summary

今年度、1学期に行った実践報告になります。報告する実践は、教科書(NEW HORIZON English Course 2)の Unit3 で行った授業になります。教科書の題材を活用して、生徒自身が好きだった絵本を紹介し合う授業を行いました。この実践のヒューマンスティック英語教育のプロセスは3つです。

1. 自己関与性と相互理解をとまなうコミュニケーション活動

自己関与性があるトピックであったことはもちろん、他のクラスメイトが紹介した本を見て共感し合う姿は相互理解にもつながる授業となりました。自分が好きだった本を紹介して、まわりの友だちが心から共感してくれる、そんな反応が自己肯定感を高めることになり、ヒューマンスティックだと感じた授業となりました。また生徒が授業で見せてくれた懐かしそうな様子は、まさに生徒の心の琴線に触れた瞬間のような気がし、授業をしている私自身も心が温かくなりました。

2. 学習者の創造性を活かした文法学習

さらにポイントとして、単に好きだった絵本を紹介するだけの活動にとどまらず、そこから一歩深める工夫をしてみました。前の単元の既習表現である接続詞の「because」と前置詞の「like」を使った定型表現を考え、絵本とはどのようなものかという自分なりの創造性ある考えを伝え合うようにしました。

3. 達成感を味わわせ、自信を高める工夫

心の琴線に触れて終わるだけでなく、言語活動をとおして達成感を感じ、自信になるような足場かけをするように考えました。最後の言語活動で生徒が自分でどのような文を作るか選択できるようにしました。つまり、自己決定する場を設けるようにしたこと。この足場かけにより、どの生徒も達成感を味わうことができたと思います。

以上が、報告の内容となります。

発表者：伊藤 世理子（名古屋市立上野小学校）

発表時間：12:00~12:25

Title: 自分の考えや気持ちを伝えることができる児童の育成 ― “I”メッセージを大切にする実践を通して ―

Summary

2023 年に国連人口基金は「世界人口白書 2023」で、世界人口が 80 億人に到達したと発表した。「人類はかつてない大家族となり人類史上のどの時期よりも長く生き、より健康な生活を享受しているが、不安で不確実な世界でもある」と記されている。これからの未来は、全人類が共に解決していかなければならない課題が多くある。その課題解決のためには、異なる言語や異なる文化をもち生きているこの地球上の大家族が、互いの存在を理解し合い尊重し合いながら協働していくことが大切である。

私は、英語という外国語によるコミュニケーションを通して、自他の存在を尊重できる態度を育成すると共に、自分の考えや気持ちを伝えることができる児童の育成が必要だと考えた。

これまで、小学校外国語科の 4 技能のうち、話すこと〔やり取り〕を重点的に活動に取り入れてきた。児童は、非言語の表現も上達し、相手の言葉を繰り返して確認したり、共感的な言葉を伝えてやり取りを円滑に進めたりすることが上手になりつつある。しかし、相手の言葉を聞いて自分の考えや気持ちを簡単な語彙で伝えることが難しい様子の児童も多く、詳しく自分の考えや気持ちを伝えることができる児童も少ない。

そこで、やり取りの中で、自分が伝えたい内容（情報）を覚えて伝え合うだけではなく、相手の言葉を受けて簡単にその場で応答したり、更に詳しく自分の考えや気持ちを伝えたりすることができるようになることを目指し「Jazz Time」と「Plus Challenge」という二つの手立てを設定した。それらの実践・検証の様子を発表し、様々な御意見をいただきたいと考えた。

研究・実践発表要旨（教室 B）

発表者：山本孝次（愛知県立刈谷北高等学校）

発表時間：10:30~10:55

Title：「知る」、「考える」から「行動する」へとつなげる授業実践

Summary

持続可能な社会の創り手を育んでいくためには、社会課題について「知る」「考える」活動に止まることなく「行動する」ことにつながる活動を授業に組み込んでいくことが大切である。現行の学習指導要領では、評価の観点のひとつとして「思考力・判断力・表現力」が入っているために、どの教科書でも「考える」活動は用意されている。それに対して、教科書では「行動する」ことにつながる活動は用意されていないことのほうが圧倒的に多い。しかしながら、社会課題の解決法を「考える」だけでは、持続可能な社会を創っていくことはできない。「行動する」ことにつながる活動にはどのようなものがあるのか実践例で示したい。

今回は、SNS の使い方をテーマとして、社会課題を知る活動としては、英国でのデジタル門限を設定する法律に関するニュースの英文の読解を行った。考える活動としては、インターネットの利用法と安全性に関するロールプレイや SNS を用いる際の最重要ルールを通して考えるグループディスカッションを行った。表現活動としては、4 人グループで"Our 5 Golden Rules for Social Media Use"のポスターを作成させ、それをを用いて発表させた。「行動する」に繋げる活動として次の 2 つを行った。①「行動宣言」：Microsoft forms を用いた振り返りの中に必須回答項目として、「今後のよりよい Social Media Use のために、こうしていきたい、こうしていきます！という内容のあなた自身の『行動宣言』を何か一つ書いてください」という項目を入れた。②ライティング「Call to Action」：Write a message to governments and/or tech companies, asking them to take action to protect young people online. Write at least 60 words. この課題を定期試験でも出題すると予告した上で、Microsoft teams に作成した「総合英語 I クラス」内で「課題」として出した。

発表者：三山 寿紀（大阪商業大学）

発表時間：11:00~11:25

Title：挑戦機会を支える合理的配慮 — 学習者の尊厳と公平性を守る教育設計フレーム

Summary

大学教育において「合理的配慮」は広く知られるようになったが、その運用は依然として属人的であり、「特別扱い」と誤解されることも少なくない。結果として、妥当性・信頼性・公平性が揺らぐ危険があり、教育の基準を守りつつ学習者の挑戦機会を保障する仕組みづくりが求められている。本発表は、合理的配慮を「特例」ではなく「教育設計」として再定義し、その可能性を探ることを目的とする。心理学理論の知見（自己決定理論・自己効力感・心理的安全性など）や国際的原則（米国の判例法、英国の予見的対応義務など）を参照し、「本質的要件は維持しつつ、手段は柔軟にする」という方向性を確認する。そのうえで、英語教育を事例とし、リスニング・スピーキング・ライティングにおける具体的な工夫を取り上げる。ここでは、音量調整や準備時間の延長といった条件調整は許容される一方、課題免除や本質的基準の変更は適切ではないことを示す。さらに、こうした設計の考え方は個別支援にとどまらず、教育現場全体の授業設計や評価方法を見直す契機ともなりうる。これにより、合理的配慮を学習者の尊厳と公平性を守る「挑戦機会を支える教育設計」として位置づけ、ヒューマンスティック英語教育における意義を提起する。

発表者：高山 渉（関西学院大学）

発表時間：11:30~11:55

Title: 日本の『私塾』における文法訳読式と Humanistic Language Teaching の統合可能性 — Postmethod 的視座と「気づき」の教育哲学的再定義

Summary

日本の英語教育現場では、私塾を中心に文法訳読式（Grammar Translation Method:GTM）が依然として主流であり、文法知識や読解力の育成には有効とされる。しかし、学習者の発話意欲や人格形成への寄与には限界があると批判されてきた。他方、Humanistic Language Teaching（HLT）は学習者を全人間的的存在として捉え、認知と情意の統合を通じて人格形成を重視する教育観を提示してきた（Moskowitz, 1978）。両者はしばしば「効率と人間性」という二項対立的に論じられるが、その接合可能性は十分に検討されていない。本研究は理論レビューにより、GTM と HLT の統合的理解を試みる。分析対象は、①明示的指導・フィードバックの有効性に関する研究（Norris & Ortega, 2000; Spada & Tomita, 2010）、②「気づき（Noticing）」概念の教育哲学的再定義（赤木,2020）、③「心を育てる英語授業」に基づく人格形成的教育論（三浦, 2023）、④英語教育を人間学的営みと位置付け「公共の福祉」や「教科の倫理」を重視する加賀田（2009）の議論、⑤Postmethod 論（Kumaravadivelu, 2001）である。検討の結果、GTM の精緻な形式分析は HLT の「気づき」と矛盾せず、むしろその一部を構成し得ることが示された。特に加賀田が論じた公共性・倫理性の観点を取り入れることで、気づきは単なる形式的注意ではなく、自己理解・他者理解・社会的責任を伴う社会 - 認知 - 情意的プロセスとして再定義できる。この視座に立つことで、GTM は HLT の人間性教育と接続可能となり、Postmethod 的に両者を補完的に統合できる理論的可能性が開かれる。今後はこの枠組みに基づく評価・実践の具体化が課題となる。